

令和5年度第1回 かめおか霧の芸術祭実行委員会 議事録要旨

日 時 令和5年4月26日（水）10:00～12:00

会 場 市民ホール

司会：事務局次長（文化国際課長）

【開会あいさつ】 桂川顧問

【委員自己紹介】

【アーティスト・事務局紹介】

（委員長）

議題（1）「令和4年度 事業報告及び決算報告」について事務局から報告をお願いします。

【事務局より決算報告】

（委員長）

ただいま説明のあった内容について意見、質問等あればお願いします。

（委員）

10 ページの文化芸術プロジェクトの支出、広報啓発経費の内訳をお聞きしたい。

（事務局）

冊子の印刷、デザイン、編集などに約2,000,000円。

広報担当の監修に550,000円。クリエイティブディレクターに100,000円

合計で2,690,690円です。

（委員）

ネットなどを駆使して内外ともに広報するというような話も以前からありましたが、それに関してこの決算書では明記されていないので、実際の状況の報告をするなど、そういった観点の議論を増やすべきであると思います。

霧の芸術祭の動画の閲覧数が少ないですね。他の事業では、いわゆる「バズる」と言われるような何万回も再生されているものもあるので、もう少しそういう方向に力を入れたりすることで、例えば亀岡市のふるさと納税などを共有できるような価値を見出すのではないかと。そのような点では、この事業の中では予算を取られてないのでしょうか。

(事務局)

そんなに大きな予算は割いていませんが、広報プロモーション課と連携して web 上で積極的な取り組みを行っています。

(委員)

そうでしたら、ぜひこの会議の中で少し触れていただければ、もう少し全体が分かりやすい。他の課との共有もこの会議の中で発信していただければ理解しやすい。

(委員)

どのようにして広報活動を報告に反映させるかはこれからの課題だと思います。かめおか霧の芸術祭は、できるだけ手触りであるもの、要するにフェイストゥフェイス、口コミをベースにしたいということが当初からあります。実際そのような口コミなどは波及効果があって、かつ動員を起こすという動機づけに役立っていると思います。芸術祭は入口に立ったところ。今集まっているようなメンバーを更にたくさん亀岡に作っていくことを第一の目的にしていたので、これまで一般的な広報があまりできていませんでしたが、しっかり広報していることを見せていくべきだと思いました。

(委員)

アーカイブブックの重要性についてアピールしたい。最初にかめおか霧の芸術祭実行委員会が開かれたときにはこのような立派な冊子はありませんでした。このアーカイブブックがある事で、次のプロジェクトを作るきっかけや、アーティストのモチベーションになっています。SNS であれば瞬発的に様々な情報が飛び交い、全体像が見えない、一時的なものになってしまいますが、アーカイブブックであれば本としてずっと残ります。ですので、この冊子がある事で「かめおか霧の芸術祭」の全体像が見えてきます。そのような意味で、このような冊子がしっかりと作られていることを私は大変評価したい。

アーカイブブックをどのように活用しているかという点はいかかでしょうか。例えば美術館やアートセンターにこのアーカイブブックを発送して、かめおか霧の芸術祭の取り組みを伝えていくことで『こういう作家がいるんだ』『こういう活動があるんだ』と認知してもらえる。そこから全体の評価が高まることにもつながるので、現状どのようになっているかはわかりませんが、今お伝えしたことを例として生かしてほしいなど。

(委員)

静と動といいますか、動というイベントと静という考えの両方をうまく駆使してこの事業を進めていくわけですが、そういうものを理解しながら、いろんな人にこの事業のよさを広めていくことについて、今後、もう少し力点を置いていただきたい。コンテンツ的に非常に

面白いものがたくさんある中で、それをここの中だけでなく広げていくことで、相乗効果が望まれる。今後の課題として、その辺は考えていただきたい。

(委員)

主催者が幅広く広報することはすごく重要ですが、もう一つは例えば展覧会だったらアーティストが、マルシェだったら出店者が当事者意識を持ってどれだけ広報するかに集客がかかっているとんでも過言ではない。大衆に向かって投げた広報と、フェイストゥフェイスというか、作家である私が来て欲しい人に投げかけた広報では重みが違う。マルシェでもお客さんを持っている出店者が集まるとたくさんの方が来られます。そういった点で、その一人一人の意識を高めるということがとても重要だなと感じました。

(委員長)

広報のあり方について今後とも引き続き検討を続けたい。

(顧問)

このアーカイブブックはいくつ作っているんですか。

(事務局)

2000部です。

(顧問)

それはどのようにして配っていくのでしょうか。

(事務局)

様々な美術館ですとか関係機関にはすべてお送りする予定ですし、霧の芸術祭の事業に参加していただいた方に必要な部数は全てお送りする予定です。

(委員長)

他に質問や意見はございませんでしょうか。

令和4年度決算報告・事業報告について、承認の場合は拍手してください。

【拍手】

(委員長)

承認くださり、ありがとうございます。

次に議題の3「令和5年度事業計画案及び予算」について、事務局より報告をお願いします。

【事務局より事業計画の報告】

【プロジェクトチームから事業計画（案）の説明】

【事務局 収支予算（案）の説明】

（委員長）

ただいま説明のあった内容について意見、質問等あればお願いします。

（委員）

農林や環境、SDGs などの関係課においては、具体的にこれらの事業についての感想やフィードバック、どのように感じ取っているのかなど、双方向のコミュニケーションが必要だと感じます。予算や事業に関して実行委員会にあまりフィードバックされていない部分があって、例えば関係者に対してもう少しこんなこともして欲しいとか、具体的に事業の内容についての深まりなどを共有したい。

私に関わっているのは城跡芸術展ぐらいで他の事業に関してはなかなか参加する事ができませんが、他の課の方々は事業に対してこの点が良かったなど感想をお聞きしたい。今日出席していらっしゃる各課の方々にも、感想になっても結構ですし、積極的に私のように発言していただくことでコミュニケーションもとれます。より相乗効果というか、様々な事業が行えるのではと思いますので、役所の方々にも、芸術的な雰囲気でもう少し楽に自由に発言していただきたい。

（顧問）

市役所の農林振興課や環境や SDGs といった課と霧の芸術祭がコラボする。これは一つは職員の持っている能力とは違う能力を取り組みに活用してもらって、市民ニーズにより合う形で進められるのではと思います。またそれをすることによって、市の職員もレベルアップができ、より良い事業展開ができる。私としては、かめおか霧の芸術祭という一つの芸術や文化をただ取り扱うだけでなく、各課がうまく連携して活用していきましょうと常に言っています。ですので教育委員会も、子どもたちとの関わりというのがこの芸術祭の中にあるのですが、今は教育委員会としてというよりも各校の家族の子どもとの関わりが大変強いことを上手く活用する取り組みをしていくことで、子どもたちのいろんな探求心が広がってくるのではと思います。今後、霧の芸術祭が一つの「知識」という意味合いで、亀岡市の行政が行う事業のレベルアップを図っていくというふうにつなげていきたいので、ご協力よろしく願いいたします。

（委員）

市民やこの市役所の方々にも、もっと霧の芸術祭に近づいていただきたい。事業としてお

金を出した、出していない、できるできないの話ではなく、幅広い事業について「この事業面白いな」と担当者の方も興味を持っていただくことで、それを突破口にして理解を深めて事業に近づいていくという点がとても大きな意味を持っていると思います。

皆さんはよく分からないとおっしゃるのですが、それは事業に近づけていない、身近になるのでそのように思われるのではないのでしょうか。もっと気楽に参加してもらって興味を持っていただくことで、この霧の芸術祭の事業が更に活発になり、関心が広く深まってく我想います。楽に考えてもらって、皆さんがもっと自由に発言できるような雰囲気があれば広がりや成長や亀岡市としての成長ができると思う。少し閉鎖的な空気があるのではと感じて発言させていただきました。

(委員)

私も一緒に早い段階から関わってきて気づいたことがあります。

最初、かめおか霧の芸術祭を始めた際は多くの方々は何をやっているかわからないという反応でした。議員の方々も割とどうということなのかというような反応だったのですが、何回も続けて経験を重ねていくにつれて、ポジティブに受け止めてくださったり、面白いねというようにおっしゃってくださって、空気が変わってきました。霧の芸術祭の一番の特徴は、亀岡市の行政と深く結びついているということだと思います。日本各地で地域に根差した芸術祭は開かれています、運営するギャラリーや芸術祭の事を把握していない方々は企画を受けるけれども、いわゆる丸投げ状態になっています。有名な芸術家を世界中から集めて、すごく知名度の高いアーティストの展覧会を開催すると確かにたくさん人は来るが、なんだか手作り感がない。会期が過ぎ去ると地元には何も残らないというような感じですが、かめおか霧の芸術祭はもっと複雑というか、もっと多方面にわたっているので、一つ一つ種を植えてだんだん育てていくという雰囲気がこのアーカイブブックの中で随分見えてきている。

亀岡市職員の皆さんもフェイストゥフェイスで私たちにすごく関わっていただいている、いろんな事業に参加していただいているので、市長がおっしゃっているように、市役所のスタッフの皆さんの理解はどんどん深まっている。

(総合プロデューサー)

お二人には本当に当初から参加していただいている、すごく勉強になっています。僕だけでなくスタッフや若手の方々にとってもです。先ほどおっしゃったような行政、霧の芸術祭の特徴というのは、市役所の各部署が抱えているような課題であったり、市民と一緒に解決したいんだけどなかなかできないというのがあったりしますが、アーティストの側から見ると、環境問題はもっとおもしろく体験ができるし、福祉の問題や教育のことも、課題であることも実は芸術家にとっては本当に面白い題材であるのではないかと。僕は大学院で10年以上、芸術環境研究領域を担当して、地域を調査してるわけですけど亀岡市はちょっ

と珍しい。普通は丸投げだし、収益や集客をどれほどあげられるかという目的になります。が、亀岡市はどれだけ手作りで自分たちでやっているか、どれだけ地域の人達を巻き込めるかという目的になっています。

知名度の高いアーティストが来ました、新しい取り組みを行っていますよ、これがうちの行政ですよというのが普通なんです。でも全くもってそうではなくて、地元になんぞごく良いところがあるというのを見せているのが、僕はずっと面白いなと思っています。

現在の若い学生が地域に持つイメージは昔と随分違います。昔は東京・ニューヨーク・パリ・ロンドンみたいなイメージでしたが、今は全く違います。地域あるいは離れ小島そして亀岡みたいな、何か面白いことをやっているところを学生たちが自分なりに探していて、その中で亀岡にたどり着いている。

かめおか霧の芸術祭の在り方は、芸術作品をどんどん見せていくということはもちろんあるのですが、地域課題をみんなでどうやって解いていくのか、それをどうやって芸術的に見せていくのかということが一番意義があるし、継続可能性があると思います。ですので、亀岡市とアーティストと一緒にやっていくということは、次世代のための新しい芸術、視野を広げる、亀岡市が芸術のマーケットになってくるのではないかと思います。

市長に一つお願いがありまして、市役所をもっと美術館のようにしてもらえたらなと思っています。廊下であったり待合室であったり、そういうところに今出席してらっしゃるアーティストはもちろん、子どもたちや若い世代の作品を展示や買い上げ、売り上げに使っていただくということを一度考えて頂けたらと思います。

(顧問)

最初は市議会で霧の芸術祭は本当に叩かれているんですよ。しかし今は全然違って、各市議会の先生方の見方も変わってきた。我々は行政として、先ほどの行政課題を違った角度から解決することを一つの手法として、かめおか霧の芸術祭を活用させていただいたことは事実ですし、市民に対しても同じ目線ないしろんな目線で定義ができるということがまた魅力的だなと思っています。

亀岡に芸術家がたくさんいらっしゃるというのは大変うれしいことですし、これは行政にとって一つの人的宝であると思います。作品を見てもらって活用していくことが大事だと思っています。霧の芸術祭での活動を通して一つの自分のキャリアにしていっていただければありがたいことですし、できればふるさと納税の返礼品として、皆さんの作品を買っていただくようなことができないか、皆さんの作品を生かしていくような取り組みをぜひしたい。そういうことを通じて、多様性の時代ですから、その多様性というものを受け入れられるような土台を備えていくことが必要だと考えています。いろんな新たな提案をどのように行政施策に生かしていけるか考えていくと、行政をする立場としても大変面白い事業ができる。

市民側からしても、とても魅力的に、また違った感覚で楽しいことができるのではないかと

と思っています。そのような意味では私は大変期待をしております。

亀岡高校と南丹高校にも関わっていただいているのですが、府立農芸高校も亀岡の子どもたちがたくさん通っています。できればこのボンボンマルシェとかそういうところに農芸高校も参加していただいて、その幅を広げて頂きたい。子供たちを育てていくという面では、農業という一つの分野の中でも有機やいろんな取り組みがあるということを霧の芸術祭の中から学んでいただいて、その中で自分を発見するようなことに繋がればいい。農芸高校も交流していただいたらどうかなということは、提案としてお願いしたいと思えます。

(委員長)

私も3月まで職員として亀岡市役所で40年働かせていただいております。その時は、かめおか霧の芸術祭は非常に高い雲の上の話だと、職員としてはそのような面がございました。ところが、かめおか霧の芸術祭の委員長になり、事業の説明を受けていたのですが、全くイメージが違いました。

例えば小さなお子様ですとか、あるいは農業関係、若い芸術家の方々が関わっていて、これだけのバリエーションの事業が行われているということをはじめて知ったような次第です。

これだけの事業をまとめて理解をしている市の職員が現状少ないということを経験を通して思いました。ですので、いろいろな意味での啓発ということが必要ということを感じたところです。そして市長が申しておりました通り、これからもさらに広げていくことが我々の仕事にプラスになると思いますが、現実この市役所の窓口で繰り広げられている仕事が、明日食べるものがないですとか、給料を払えないんですとか、こういったお願いやご要望を聞きながら仕事をしているものにとりまして、どのようにつなげていくか、そういったこともこれから先ぜひとも考えていきたいなというように思いました。

令和5年度の事業計画、予算案につきまして、皆様方のご承認をいただきたいと思えます。承認いただけましたらどうぞ拍手をお願い申し上げます。

【拍手】

(委員長)

ありがとうございます。

それでは本件につきましては、原案通り承認をされました。

本日ご参加を頂いている方々に、わずかな時間ではございますが、ぜひ意見交換をしていただければと思います。指名して恐縮ですが、亀岡高校さんはいかかでしょうか。

(委員)

自己紹介の時に美術工芸専攻があるという話をしたのですが、実は各学年はほぼ一クラスだけで、美術工芸専攻は30人です。普通科が200人それから探求文理科が1クラス40人ということで、多様性という観点から見ると、本当にいろいろな目的を持っている生徒が校内にいます。

普通科でも芸術を頑張っている生徒が、例えば開かれたアトリエなどで展示して、人に見て頂く、その講評なり感想をいただくということが非常に子どもたちの成長に大きくつながっている。美術工芸専攻の生徒だけでなく、そのほかの生徒にとっても大きいなということを感じています。高校としてできることは微々たるものなのですが、ただこういうところで参加させていただいて、生徒たちがいろんな機会を得ていくことに感謝を申し上げますし、やはりこのような機会を私たちもどんどん活用していきたいなと思います。

(委員)

本校は美術関係の部活動がありませんので、自分の制作物を校内展示だけでなくアトリエに展示してたくさんの人に見て頂ける機会があるというのは大変大きな刺激になっています。ただ、昨年度展示して頂いたことについて、残念ながら本校の関係者であっても足を運ぶ機会が少ないので、校内や本校のホームページで生徒たちの作品が展示されているということをもっとアピールして、いろんな人が足を運ぶ機会やきっかけをもっと作らなければと思います。

せっかくいろいろな方からのお力を借りて、アドバイスも頂いていて、本当にお世話になっているのに、その効果が出ていないという反省をしました。私自身も、本校の生徒たちの作品が展示されたり、関わっていただく中で日々の芸術祭の内容をよく知る機会がありましたが、先ほどお話に出ていた広報体制や、市民の方がたくさん来ていただけるような場所で、高校生が活躍できたらうれしいなと思っております。

本校は口丹地域以外からも1割以上の生徒が通学しております。亀岡以外の生徒たちは自分の住んでいるところではないけれども、もっと口丹地域にも愛着を持ってもらって貢献できるような人材になってくれたら良いなと思います。

(委員)

芸術家の若い方も含めて、やはりそのような方が亀岡に来ていただくことが本当にうれしいことだと思います。霧の芸術祭を通じて若いアーティストも大変多く関わっていただいていますし、チームの方々に亀岡市にお住いの方もいらっしゃいます。そういった意味でこの芸術祭は非常に大きい役割を果たしている。

芸術というのはまさしく多様性の世界ですし、作品などを見て素晴らしいなと感動する人もいればそう思わない人もいます。市民や私たちも食わず嫌いではなしに、いろんなものを見て、心を豊かにしていくということが大事ですし、かめおか霧の芸術祭を通じて市民がいろんな芸術に触れて頂くことが大事だなと思っております。

(委員)

エコロジックミュージアムの創造ということを目指して商工会議所や青年会が活動していた中で、ようやく亀岡駅が変わってきた。亀岡駅の周りや亀岡全体が美術館のようなものになったらいいなということで若い頃から活動してきたんですけども、ここ最近は霧の芸術祭とかの話もよく聞きます。観光協会や商工会議所などの情報拠点はやっぱり亀岡駅になってくる。かめまるマートも改装してお客さんがたくさん来てくれています。あぁあったところに紙媒体の情報を含めてやっていきたいなと思います。

旧商工会館はここ数ヶ月の間に解体します。うまくいけば来春ぐらいから着工予定なんですけど、そういった場所も、壁面なんか十分芸術を描いていただけるような場所があるんじゃないかなと思います。京都信用金庫のクエスチョンの壁面も相当すばらしい芸術があります。そういったものも利用して、亀岡の各種団体が一丸となってやっていけば。亀岡に点在しているものを一つにまとめるのがちょっと難しいなところなんです。どこに行っても同じようなメンバーがいらっしやる。皆で盛り上げていけたらなと思いますし、今日は良い機会をいただきました。

(委員)

今日の実行委員会で聞いたお話を青年会議所のメンバーに伝えることによってさらに広がっていくと思いましたが、またこのようないろんなプロジェクトに参加させていただきたいと思います。

(委員)

芸術は一番自己実現が高い階層の活動になるのではないかな。私どもと芸術の部分をどのようにして組み合わせたら良いのか考えがまとまりません。観光という分野でいうと、例えば美術館をPRして観光の起爆剤にしているのは日本中にたくさんありますし、有名な方を交えるといったお話もあります。亀岡というこのエリアでそのようなPRをしていくことを考えた時に果たしてどうやっていくのが良いのだろうかというのが、私なりに今後の課題としてありますし、今後いろんな協議を聞きながら考えていきたいと思っています。

(委員)

地域課題をアーティストの視点でどのように取り入れていくかというのが、霧の芸術祭の非常に大きいミッションではないかと思っています。

そういったときに城跡芸術展であったり開かれたアトリエであったり、今はどちらかというとそこに来てもらわなければ体感できないが、各地域の課題をどのような視点でフォローしていくか。出ていくというのも一つの手ではないかと思っています。今は急にはできない

かもしれないが、そのような体制というか仕組みもこの事業を展開して広げていく一つのポイントではないか。

(委員)

亀岡市の課題となると、学校で美術に触れる時間が、中学校は週1時間である点だと思います。ですから作品を作る時間が限られている。最近美術部の数がぐんと増えています。ですから、美術に興味がありながら触れる機会がないといった点がありながら、小学生、中学生、高校生と分かれている学校もあり、小中高と一貫教育もある中で、その繋がりでなにかできないかなと話を聞きながら感じておりました。特に中学校現場ですと、親子の繋がり、家族のつながりなどの課題がありますので、子ども個人で取り組むのはもちろん、親子や家族で、3世代でといった形で何か取り組みができたらと思いながら、私たちの立場で何ができるかなとお話を聞かせていただいていたいました。またどのような形になるかはわかりませんが、いろいろ考えさせていただきたいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。

(委員長)

皆様のご協力によりまして、議事進行ができましたことを感謝申し上げます。進行につきましては事務局の方にお返しをさせていただきます。

(事務局)

令和5年度事業計画の中で一つだけ補足をします。今年度新たにクリエイティブディレクターという役職を加え、藤井さんにお世話になることになっておりますので一言いただきます。

(クリエイティブディレクター)

今年度からクリエイティブディレクターとして役職を与えて頂きました。

今日、委員のお話を聞いた直後から何か大きなものが私の肩に乗ったような気がしていて、これには絶対応えなければならないという決意を自分の中で確認できたところで。具体的には、「静」と「動」の話が一番しっくりきています。書籍で残していくアーカイブブックやチラシと、ウェブサイトのデザインというのは、僕らデザイナーにとってはかなり棲み分けがはっきり分かれていますので、表現はしっかりと分けなければならない。霧の芸術祭も5年以上経って、ウェブサイトに載っている情報量はとて多くなっています。本は読み返すことができるという特徴がありますが、ウェブサイトは一つのページにいろんなページがぶら下がった多方向の媒体で、階層という考え方になります。

ウェブサイトは一旦整理しないとイケない状態になっていると思っております。

今までの情報と、これからの情報をどう残していくかみたいな頭でウェブサイトはデザイ

ンしていこうかなと考えています。どう広報していくかという話もありますが、同じぐらいにどう残していくのかというのをデザインする立場で、今年度から携わろうと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(事務局)

ありがとうございました。それでは閉会にあたりまして、総合プロデューサーからごあいさつをいただきます。

(総合プロデューサー)

今ここでスタッフとして来てくれている方たちは、だいたい20代から関わってくれています。最初芸術祭を行うという話の時に、20代から30代の方たちでやっていきたい、僕は後ろからサポートするというのを市長にお伝えした。ここにいるスタッフもあと10年経ってもまだ30代や40代。若い世代がこれからのまちを作っていくのだと思うと、亀岡はすごく住みやすいし、住んでいきたいまちになると思います。

かめおか霧の芸術祭は外から有名なアーティストを呼び込むというよりも、実はいっぱいまちに住んでおられる。有名なアーティストよりも、有名になるアーティストを呼んだ方が僕は値打ちがあると思っている。ただ有名なアーティストを連れてきたらそれで済むと思っているのは、これは行政として失格だと思います。有名なアーティストを作ればいいし、円山応挙や出口王仁三郎はここで生まれた、作られた人達ですから、この霧の芸術祭実行委員会というのは、これから社会に貢献していく、そのような人材を作っていく場所であると思います。

美術の時間が週1時間であるという話がありましたが、そんな中で何ができるのでしょうか。小学校や中学校が廃校になっていく時に、廃れていった美術や習字や音楽や、そういったものを廃れていった学校に持ち集めて、そこで新たな教育の現場を作っていくのは、すごく楽しいことじゃないかと思っています。

廃校という資源の循環、その周辺に住んでおられる方々の人材の活用、荒れ果てた山や野原と一緒に耕し育てていく、そして若者たちが集まってくるといったようなことが、一つの拠点として作っていけるのではと思います。亀岡は本当に魅力あるまちにこれからどんどん育ってくると思いますし、僕はいつ霧の芸術祭を切り上げようかなとも考えていたのですが、今日のお話を聞いていて、あと10年は芸術祭を続けていただかないと困るなと思います。子供たちに向けての取り組みを霧の芸術祭の中でやっているんですけども、その子供たちがまた今のスタッフの世代に育って、という循環が生まれるのではないかと考えています。

(事務局)

本日はありがとうございました。